

Title	『花関索伝』の「花」と「少年浪子」
Sub Title	The 'flower' and 'playboy' in the "Hua Guansuo Zhuan" (花関索伝)
Author	立間, 祥介(Tatsuma, Shosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.95- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0095">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0095</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『花関索伝』の「花」と「少年浪子」

### 立 間 祥 介

毛宗崗本『三国志演義』第八十回に突然登場し、諸葛孔明の南征に従軍することになる関羽の三男関索のことは、『水滸伝』梁山泊天罡星のひとり病関索楊雄や『東京夢華録』など宋代都城の繁盛記に見える小関索・賽関索など芸人の渾名などと結びつけて、以前から論じられてき、また孔明南征の足跡の残る西南部に関索嶺・関索祠など関索ゆかりの場所や古跡の多いことが古くから指摘されてきた<sup>1)</sup>こともよく知られているところである。

史書によれば、関索の子は関平と関興の二人だけで、関索という人物については何も書かれていない。

この関索の謎にわが国で最初に着目したのは管見によれば小川環樹氏で、氏は『三国志伝』系のテキストに関索の出自を物語った「関索荊州認父」が付加されていて、これら「異本の系列における関索の物語には民間説話の色彩が濃厚で、叙述は粗雑である」ことを指摘するとともに、「関索はその説話が発生した当初から、人間よりもむしろ神であったと思われる」として、貫索九星との関係を問題にした<sup>2)</sup>。

一方、中国では七十年代にはいり明成化年間刊の「説唱詞話」十数種が復刻刊行され、「花関索出身伝(前集)」・「花関索認父伝(後集)」・「花関索下四川伝(続集)」・「花関索貶雲南伝(別集)」の四篇よりなる「花関索伝」が世界に紹介された。

この「花関索伝」により、従来『三国志伝』系の諸本により一部知られていた花関索物語の全容が明らかになり、まさに、これは「説唱文学の最古の版本に属する點、亡佚しい物語を甦らせた點、また元明の文獻に見られる『詞話』という語の概念を實物をもって一挙に明確化した點などにおいて、白話文学の研究史上、中国哲学史研究における馬王堆の老子にも匹敵する劃期的な発見<sup>③</sup>」であつた。

尾上兼英氏の「成化説唱詞話」試論(一)——『花関索伝』をめぐる——<sup>④</sup>は、同時に出土した説唱詞話本十種とあわせて、「花関索伝」をわが国ではじめて紹介したもので、「関羽の死後も身代わりとして子息を活躍させる趣向から、史実を無視して、関平を活躍させるとともに、関索を登場させるとすれば、活躍の場も諸葛亮の南征ということになるのではなからうか。そのために貴州・雲南地方で活躍することになる関索にまつわる史蹟が、あとから作られた可能性が大きいように思われる。」「また関索が重要な人物となるにつれて、『出身伝』から始まって「認父伝」「下西川伝」「貶雲南伝」と、誕生から死に到る一貫した伝記が形成されたのであろう。『水滸伝』中に「病関索楊雄」の名が見えるところから、関索伝の成立は宋末にまで遡ることができよう」と指摘している。

古屋昭広氏の「説唱詞話『花関索伝』と明代の方言」<sup>⑤</sup>は、『花関索伝』の成立と背景を探る手掛かりとして、解説上の幾つかの問題、特に假借字に見られる音韻上の問題に焦點を据えて詳細な検討をおこなつたうえで、「その中に呉語的な假借が見られるからには、江南における弾詞の祖型にあたる演藝が呉語圏の人の手によって寫定され、読みものとして印行されたものと推定することが許されよう」とした労作である。

これは、井上泰山・大木康・金文京・水上正・古屋昭広の五氏による「説唱詞話研究会」の会読の成果の一つといわれるが、水上正氏「『花関索伝』研究ノート」<sup>⑥</sup>・金文京氏「関羽の息子と孫悟空」<sup>⑦</sup>もこの会読会の成果であるとい

う。

水上氏の「研究ノート」は、唐以来の関索にまつわる伝承を紹介し、宋代に語られていた『水滸伝』の原型について触れたあと、『水滸伝』中の英雄のひとり病関索楊雄が天牢星の化身とされていることに着目し、天牢星がすなわち貫索九星の別名であることを指摘している。これは、小川氏の関索と貫索九星との関連についての推論より一步深めたものといえる。水上氏はまた、楊雄が見事な刺青をしていたことをとりあげ、花関索の「花」が『水滸伝』の「花和尚魯智深」の「花」（刺青）に通じるのではないかと指摘し、金氏が指摘した『水滸伝』の豪傑たちと扱ぶところが「花関索像を裏付けるひとつの観点を提起した。

金氏の論文は、『花関索伝』の中にみえる神話的説話的要素を、劍神（鉄の英雄）、小童、水神という三つの側面から考察し、花関索は「ユーラシア大陸各地にみられる『劍神—小童—水神』の複合信仰の中国における一類型であったかと想像される」として、「それが『三国志』といふ歴史物語の世界を借りて説話化されたものがすなわち『花関索伝』であろう」としたもので、民俗学・神話学的観点からの間然するところのないユニークな論考である。

一方、中国でも趙景深氏の「談明成化刊本『説唱詞話』」（『文物』一九二七年第一期）で「花関索伝」を含む「説唱詞話」本の概要が報じられて以来、いくつもの論考が発表された。これらのうちでは、「花関索伝」発見以前に書かれた周紹良氏の「関索考」が花関索を含む関索関係の資料として便利であるほかは、概して「花関索伝」の紹介か『三国志演義』との関係に触れたもので、前記のわが国の諸氏の論考以上のものはないように思われる。

「花関索伝」そのものについて、またそれが成立した当時の「その読者もしくは聴衆」との関係については、金氏がその論考の最後で述べている、『花関索伝』は、その読者もしくは聴衆にとって千年近くも昔の歴史であった『三国志』

の世界をその表向きの舞台としながら、その裏その裏には、彼らにとつてのより身近な現実であった『水滸伝』的盜賊の世界、そして更にその裏には、彼らの想像力の中に存在した、そしておそらくは、はるか遠い昔の神話への記憶の残影を揺曳した『西遊記』的妖怪の世界を潜ませるといふ重層的構造をとつていのである。このことからわれわれは、当時の民衆が歴史的事実をどのように理解していたかを知ることができよう。彼らにとつて、劉備は山賊の親分、孔明は魔術師であつたのである（下・八九ページ）という周到な考察以上に付け加えるなものもない感がある。

『三国志演義』の原型が北宋の頃にできていたことは、『東坡志林』（卷六）に「王彭嘗て云う……」として、劉備を善玉とし、曹操を悪玉とする「古話」を子供相手に物語る講釈師がいたことが記載されていることでよく知られている。また同じころ、三分争の説話を影絵芝居とした芸人がいたともいふ（『事物紀原』）。しかし「説三分」は長編であり、前編を通して聞くのはそれなりの時間が必要である。この点、花関索の物語は『水滸伝』の英雄たちの銘々伝のように、比較的短くまとめることができるので、瓦舎でもよく行われていたのであろうし、その講釈の「話本」が「花関索伝」だったのであろう。「花関索伝」が関索中心の『三国志』物語になっているところは、元刊『全相三国志平話』が張飛中心の『三国志』物語になっているのと同様、当時、張飛を主人公とする説話が花関索説話と並行し「説三分」の外伝のような形でおこなわれていたことを物語っているといえよう。

金氏が指摘しているように「花関索伝」では関索が「身材不抵拳来大」・「上下不長四寸五」（後伝）といった「小童」であつたことが、各所に書かれている。これは関索説話が金氏が指摘しているように、本来「小童」説話として成立したことからきたものだろう。『角川漢和中辞典』に付された「おもな度量衡の単位別の時代別変遷表」によれば、宋・元の一尺は三〇・七二センチメートルという。とすると、「四尺五寸」は一三八・四四センチメートルだから、たしかに小男

である。「四尺五寸」の小男というと、わたしは『水滸伝』の英雄武松の兄武大を思い出す。同腹の弟武松が「身長八尺、一貌堂々、渾身上下、有千百斤気力」という豪傑であったのに対し、兄の武大のほうは「身不滿五尺、面目丑鄙、頭腦可笑」というありさまで、土地の者から「三寸丁穀樹皮」(ちんちくりんの黒あばた)<sup>⑨</sup>と渾名されていたという。「四尺五寸」の関索に対する「身材不抵拳来大」・「関家小形人」(別集)などという罵言も、いってみれば武大の「三寸丁穀樹皮」のようなもので、聴衆は関索についても「小童」をとくに意識することなく、背はちと低いが武勇は抜群の好漢を見ていたものだろう。

『三国志伝』で「身長七尺、面似桃花」(第百五回)となる関索は、このような聴衆の見方が反映したものと思われる。そこではもはや関索を「他父(関羽)生得長大、如何這孩兒恁小」(前集)というようなことは言われない。ちなみに、『三国志演義』で見ると、劉備七尺五寸、関羽九尺、張飛八寸、(以上第一回)、趙雲八尺(第七回)、孔明八尺(第三十八回)などとあるなかで、曹操ひとり七尺(第一回)となっている。<sup>⑩</sup>彼らの身長について、『三国志』ではなんら触れられておらず、すべて『三国志演義』作者の仮託だが、曹操が背の低いことを意識していたことについては、匈奴の使者を引見したとき、「自以形陋、不足雄遠国」と、崔季珪を身代わりに立て、自らは太刀持ちとして侍立したというエピソードが『世説新語・容止篇』にあり、その「注」に「武王姿貌短小」とある。『三国志演義』で彼の身長を七尺としたのは、このエピソードにもとづくものだが、だからといって、彼を罵る言葉として「姿貌短小」を用いた例はない。つまり、講釈の世界では「身長七尺」といえば、並みよりいくらか背が低いというだけで、特に嘲罵の対照にはなっていない。花関索は「花関索伝」でしきりに「小童」を強調されたものの、受け手の聴衆の印象では、むしろ次々と強敵を破ってゆく好漢としての姿のほうが強かったのだろう。

こうして、四尺五寸の小男であるはずの花関索が、のちには巨漢関羽愛用の「三停刀」を揮って陸遜ひきいる呉の大軍を打ち破るようになる(別集)。丘衢山は斑石洞の花岳先生のもとで修行していたとき素童、道童などと呼ばれていた花関索が、母親胡氏をともなつて父親関羽のもとへ旅立つのは十八歳のときであるが、それ以後の彼には「少年」(若者)という修飾語がつく(初出は「前集」第四葉A)ようになる。そして、その容貌も「誰家子弟小官人、丹鳳眼長眉又黒、腮紅口小密朱唇、為甚郎君生得好、胭脂若就粉庄成」(「前集」独四葉B)と形容される。水際立つた若武者振りだ。彼はまず太行山に山寨をかまえた十二人の頭目を破つて配下(弟分)とし、さらに鮑三娘・王桃・王悦という三人の女傑を破つて妻(押寨夫人)とする。堂々たる好漢である。これらの設定は、「桃園結義」のあと、関羽と張飛が劉備との義を全うするために、たがいの家族を殺害するという冒頭の設定とともに、「水滸伝」的遊俠世界の仕来りであり、まさに金氏が指摘しているように聴衆は「その裏に」、「彼らにとってのより身近な現実であった『水滸伝』的盜賊の世界」を見ていたのである。

十八歳のとき「少年」と呼ばれた花関索は、その後も「小童」と呼ばれる一方、その晩年の三十六歳になつても(別集)第六葉Aに「離了師傅十八載」とある。「師傅」は花岳先生)相変わらず「少年」と呼ばれる。この「少年」と「小童」だが、「小童」が主として「白」の部分で使われるのに対し、「少年」はもっぱら「唱」の部分で七字句を作るために頻用される。時に「少年」に「浪子」を加えて「少年浪子花関索」の七字句にしている箇所(「続集」一〇葉B・「別集」九葉A)もある。「花関索」の三字が用いられるのも「唱」の部で、七字句を作る必要から「関索」であつたり「花関索」であつたりする。「白」の部分では「関索」二字の場合がほとんどである。

花関索という名は、師匠の花岳先生、実父の関羽、養父の素員外、三人の姓をとつて付けたことになっているが、今

も述べたように「白」の部分では「関索」の二字が使われ、「花関索」の三字が「少年」・「浪子」などともにもっぱら「唱」の部分で使われるのは、「花」が「少年」や「浪子」と並んで関索に対する修飾語に過ぎないことを物語っている。

王利器氏はその「水滸伝」英雄の綽号<sup>①</sup>のなかで、花和尚の「花」には「花繡」の「花」と同時に、「花俚胡騷」或いは「冒牌」の意もこめられていると指摘しているが、「花」を刺青とれば、これはまた「浪子」という渾名にも通じる。「浪子」についても王論文は詳しく述べているが、『水滸伝』の浪子燕青は、「六尺以上身材、二十四五年紀」で、「一身遍体花繡」であつたとあり、その容貌も「唇若塗朱、睛如点漆、面似堆瓊」（『水滸伝』第六十一回）と、花関索のそれとよく似ている。身長についても、彼の主人盧俊義が九尺に對し彼が六尺といふのは、関羽の八尺に對する花関索の四尺五寸といふ關係に似なくもない。「浪子」とは、（一）遊蕩不務正業の人。（二）風流（人）（陸澹安編著『戯曲詞語匯釋』三四四ページ）をいふという。燕青や花関索の場合はもちろん（二）の解に従うべきだろう。

関索が刺青をしていたという記述はないが、以上から見て聴衆はそのように見ていたのではないかと考えられないこととはないし、十八歳にしてすでに三人の妻に囲まれた艶福家でもあつた彼はまさに「浪子」と呼ばれるにふさわしい人物だつた。しかも彼は燕青同様の武芸の達人でもある。聴衆はそのような関索を「少年浪子」ととらえ、その活躍に喝采をおくつたものであろう。そうした聴衆のなかで、もともと四尺五寸の短身だつた関索は浪子燕青をも越える七尺に成長し、より一層「少年浪子」にふさわしい男伊達に成長したものだらう。『三国志伝』に「花関索出身伝」の一部を取り入れた整理者は、このようにして聴衆のあいだで育てられた「少年浪子」像を重視し、関索の身長を七尺としたのかも知れない。

以上、わたしは「説唱詞話研究会」の金氏・氷上氏らの業績をなぞりながら、「花関索伝」成立当時の聴衆の関索観な

どについて若干考えてみたが、説唱詞話本「花関索伝」からは、口述者の口調がなまましく伝わってき、ついついこんなことを考えてみたくなる。説唱文学の真髄をつたえるものといっても過言ではないであろう。

注

- (1) 周紹良「関索考」(『学林漫歩・二集』所収 中華書局 一九八一年。本論文は二十数年前に書かれ、「花関索伝」刊に  
あたり発表うされたものという) 参照。
- (2) 小川環樹『中国小説史の研究』(岩波書店 一九六八年) 第二部第二章「関索の伝説そのほか」および「二刻英雄譜・  
解説」(「二刻英雄譜・三」所収 同朋舎 一九八〇年) 参照。
- (3) 古屋昭広。注(5) 参照。
- (4) 尾上兼英「成化説唱詞話」試論(一)——「花関索伝」をめぐって——(『東洋文化』五八号 一九七八年)
- (5) 古屋昭広「説唱詞話『花関索伝』と明代の方言」(『中国文学研究』第一〇期一九八四年)
- (6) 氷上正「花関索」研究ノート(『無名』第六号 一九八四年)
- (7) 金文京「関羽の息子と孫悟空」上(『文学』一九八六年六月。同下(『文学』一九八六年九月)
- (8) 丘振声「へ全像通俗三国志伝」中的関索(『三国演義縦横談』所収 漓江出版社 一九八三年)、譚良嘯「花関索伝」  
対「三国演義」研究的啓示(『三国志演義』研究集』所収 四川省社会科学院出版社 一九八三年) 陳翔華「俗文  
学創作与「三国志演義」」(『俗文学論』所収 黒龍江人民出版社 一九八七年)
- (9) この訳語は駒田信二訳講談社文庫版『水滸伝・巻二』二二二ページによった。
- (10) 『三国志演義』中、もっとも短軀の例は張松で「身短不滿五尺」(第六十回) とある。
- (11) 『水滸研究論文集』所収 作家出版社 一九五七年。王利器『耐雪堂集』(中国社会科学出版社 一九八六年) に再録。